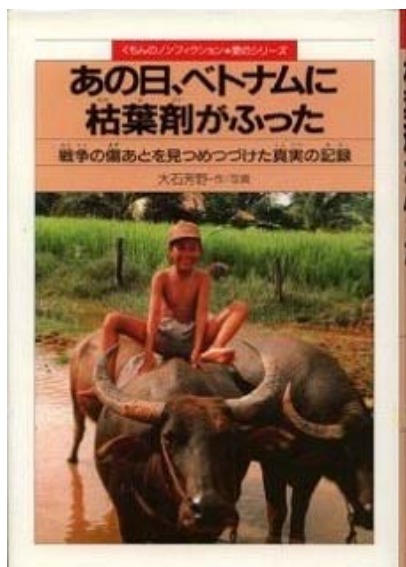


「あの日、ベトナムに枯葉剤がふった」大石 芳野— 作・写真

斉藤スミ子 '16.3.4



写真に興味を持っていたので、NHKの深夜番組で聞いた「大石芳野」という女性報道カメラマンに興味を持ち図書館で本を2, 3冊借りてきた。写真集は「黒川能の里」「ソビエト遍歴」で、写真というツールで世に訴えている報道カメラである。

「ベトナムに枯葉剤が」は子ども向けのほんである。ほぼ私と同年齢の女性ということでもまず、興味を持ちました。

ベトナムはフランスの植民地であった、また、日本とフランスの2重の支配下になったこともあるという。その後、アメリカのベトナム戦争があり（1960-197

3?）アメリカは大量の枯葉剤をまいた。その実態を子ども向けに書かれていた。力で弱者を抑え込み、富を奪い取る手口はいつの世もどこの国でも同じだと思う。枯葉剤の被害はこんなにひどく長い年月、苦しめていたことを改めて感じた。

目をそむけたくなる実態や写真がいっぱい。

その中でも、子どもたちは「勉強してお医者さんになるの・・・」とか、死を前にしても生きる前向き、明るさ、目の輝きに胸が痛む。

「目には目を、歯には歯を・・・」と旧約聖書にあるが、原爆も枯葉剤も落とした分だけアメリカにも味わってもらいたい。でないと被害者の痛みはわからないのではと、この本を読んで思ってしまう。

ベトナムは、フランス、日本、アメリカ、カンボジア、中国など外国との長い長い戦いの歴史であったことも改めて感じた。この後も世界では湾岸戦争、アフガニスタン、身近なところでは天安門事件、韓国の光州事件もあった。

日本でも「1億総活躍時代?」というけれど「一億総貧困化でしょう!」と言いたくなる貧困化が進行している。これは戦争とは違うけれど、平和な日本なんて安閑としておられないような気がしている。